

## データによる正当化と推論主義

朱 喜哲 (Heechul Ju)

大阪大学大学院

現代社会において、何らかの主張を正当化するためにデータが持ち出されることはごく日常的に行われる。政策決定や計量志向を備えた諸科学の領域ではもちろん、いわゆるビジネスの現場や友人間の会話など、さまざまな場面で、私たちは自身の主張について何らかのデータを示すことをもって正当化することがある。こうした際に私たちが行っている「データによる正当化」とは、一体どのようなものであり、なぜそれは主張を正当化する権威を持っていると言えるのだろうか。

このような広く「データ」を哲学分野において取り扱う場合、すでに取り組みられている分野は少なからず存在する。統計の哲学や確率論の哲学、あるいは因果の哲学などがそれに該当するだろう。本発表の関心の一部もそれらに連なるところがあるものの、中心的な関心は異なる。ここで明らかにしたいのは、「データによる正当化」が行使される際の言説的実践 (discursive practice) そのものである。データが正当化に関わるとき、そこではデータを理由とした推論が実施されていることになる。このとき、「データ」は推論実践のなかでどのような役割を担い、いかなる意味を持っていると言えるのだろうか。たとえば以下の推論はどうだろうか。

- (1) テストの結果、バナーAはBよりもクリック率が  $y\%$  高かったので、Aを採用する。
- (2) タバコを吸うと肺がんを発症するリスクが  $x\%$  上がるので、私は喫煙しない。
- (3) ナビアプリで現在地から目的地への最適ルートが提示されるので、それにしよう。

これらはいずれも何らかのデータに基づいた推論であるが、それぞれの推論のたしからしきは異なる基準から判断されるべきように思われる。たとえば、(1) であれば有意性検定の結果次第であるし、(2) はこの数字を提出したモデルの妥当性、(3) はアプリの信頼性の問題などである。しかし、同時にこれらの推論におけるデータの役割は共通している。

本発表では、ロバート・ブランダムが展開する推論主義 (inferentialism) に依拠し、推論主義的意味論および規範的語用論の観点から、「データ」をともなった推論を分析する。ブランダム自身、推論においてはたらく規範性をスコアとして明示化しつつも、その計量的性格を取り扱っておらず、理論の拡張を試みる。